

特別支援学校小学部での教育実習における 教育実習生に対する指導内容

— 指導案指導と授業反省会を通して —

坂本 学*・丹羽 克文*・下地栄津子*・齋藤志保子*
河辺 正明*・山田 賢治*・山本 敬子*

現行の教育実習は授業づくりを中心に位置付け、教育実習生に対する指導が行われている。教育実習生の授業づくりにおいて効果的な実習指導をするには、現在行われている教育実習生に対する指導内容について分析しておく必要があると考えた。そこで、特別支援学校での指導案指導と授業反省会での指導内容の傾向を分析し、授業づくりのための効果的な指導の視点を見出すことを試みた。その結果、実習指導初期段階では目標に関わる内容を取り上げ、次に授業における指導に関わる具体的な内容を取り上げること、教育実習生が目標との関連やマクロの視点で授業を捉えること、教育実習生が問題意識をもった内容に対して対応することが効果的な指導につながると考察された。

キーワード：特別支援学校、教育実習、指導内容、授業づくり、指導案指導、授業反省会

1 問題及び目的

本校は三重大大学教育学部の附属学校として、毎年、教育学部生と特別支援教育専攻科学生を合わせて 30 人弱の教育実習生（以下、教生）を受け入れている。教生は、小学部、中学部、高等部の 3 学部に分かれるため、各学部には 10 名程度の配属となっている。

本校の教育実習の目標として、①児童生徒一人ひとりの理解、②教師の指導技術の習得、③教師に対する自覚と研修の 3 点があげられている¹⁾。これらの目標を見る限りでは、授業づくりという言葉は入っていないが、②教師の指導技術の習得に関わって教育実習の中心的な位置付けに授業づくりがあると考えることができる。

教育実習においても、授業づくりが全てでないのは確かなことである。しかし、本校の教育実習においても、指導案作成から授業の実施、反省、再度指導案の作成といった PDS サイクルを経て授業づくりがなされており、教生に対する指導時間の大多数を占めている。具体的には、放課後の教生に対する指導では、指導案指導と授業反省会が毎日のように実施される。教生は指導案作成と教材づくりに追われ、授業づくり中心に教育実習が進められているのが現実である。

この授業づくりでなされる PDS サイクルは、教生のための授業改善システムとしての意味合いがある。実際にこのサイクルを経ることによって、教生の授業はよりよいものに改善されていっている。

しかし、教生に対する指導を行う教員が指導案指導や授業反省会においてどのような内容について指導するかに関しては、教員各自に委ねられていると言える。教員対象の教育実習事前研修では、指導案の各項目に対する記述内容についての確認はしているが、指導案指導や授業反省会に関わっての具体的な指導内容については取り上げられていないのが現状である。

教育実習に関わる先行研究としては、教育実習の実施形態や評価に関わる客観的・外面的側面に着目した調査研究²⁾、教育実習に関しての現況報告や事前指導のありよう等についての報告³⁾、「附属学校園と協働した学部レベルでの学習指導案の指導」についての提言⁴⁾もなされている。また、教育実習における授業場面での教生の関わりについて検討した研究⁵⁾もある。しかし、教生に対する具体的な指導内容や指導の進め方に関する研究は、ほとんどなされていないのが現状であろうと考えられる。特別支援学校に限定した教育実習における教生に対する指導案指導や授業反省会で取り上げた指導内容に関する研究はないと言える。

PDS サイクルが基本となった授業改善システムの機能をもった教育実習であるが、教生に対する指導に関しては教員各自に委ねられた教育実習となっている。また、教育実習に関しての先行研究も十分でないと考えられる。その上、指導をする教員を見てみると、教員経験年数も多様、特別支援学校の経験年数も多様、教生への指導経験年数も多様となっている。このような状況においてより効果的な実習指導をするためには、現在の教生に対する指導内容の傾向を把握した上で分析し、教生に対する授業づくりに関

* 三重大大学教育学部附属特別支援学校

しての指導観点を明確にしておく必要があると考える。

ここでは、特別支援学校での教生に対する指導案指導と授業反省会での指導内容を分析し、授業づくりのための効果的な指導観点を見出すことを目的とする。

2 方 法

200X 年度の附属特別支援学校小学部に配属された教生 10 名とその教生が担当した授業の指導教員 7 名（のべ 10 名）を対象に、指導案指導と授業反省会を終えてからアンケート調査を実施した。

教生 10 名の内訳は、特別支援教育専攻科の 2 週間実習生 5 名、教育学部 3 年生の 4 週間実習生 5 名である。指導教員の内訳は、30 代から 40 代の教員で、特別支援教育の経験年数が 2 年目の教員から 20 年以上の教員までおり、教育実習の経験もほぼ同様の傾向である。

2 週間実習生には、生活単元学習か図工科の授業をいずれか 3 回担当するため、指導案指導後のアンケート及び授業反省会後のアンケートをそれぞれ 3 回実施した。

4 週間実習生には、生活単元学習か図工科の授業をいずれか 3 回担当するが、3 回目の授業に対する指導案指導を行わないため、指導案指導後のアンケートを 2 回、授業反省会後のアンケートを 3 回実施した。

アンケート内容に関しては、以下の通りである。

指導案指導後の教育実習生に対するアンケート

今回の指導案指導で学ぶことができた内容について 3 項目に絞ってあげてください。

授業反省会後の教育実習生に対するアンケート

今回の授業の反省会で学ぶことができた内容について 3 項目に絞ってあげてください。

指導案指導後の指導教員に対するアンケート

今回の指導案指導で教生に重点的に指導した内容について 3 項目に絞ってあげてください。

授業反省会後の指導教員に対するアンケート

今回の授業の反省会で教生に重点的に指導した内容について 3 項目に絞ってあげてください。

それぞれのアンケートで 1 位から 3 位までの順位も付けて回答するようにした。そして、3 項目をあげやすいように、具体的な項目名をいくつかあげておき、そこから選択できるようにした。また、項目名をあげるだけでなく、具体的な内容についても記述できるスペースを設定した。この具体的な内容を基に、筆者によって妥当な項目名に変更したものもあった。

指導案指導後のアンケートの選択項目

目標の精選、目標の具体化、題材の分析、指導方針・指導の仕方、児童の実態、目標と題材との関連、目標と指導の関連、本時案の授業展開のイメージ化、一人ひとりに応じた手だて、児童のわかりやすさ・できる状況、児童への働き掛け方法、授業評価、TT、指導案の書き方 等々

授業反省会後のアンケートの選択項目

目標の妥当性、教材の有効性・妥当性、指導の仕方の有効性・妥当性、授業展開の妥当性、児童の目標の意識化、一人ひとりに応じた手だての有効性・妥当性、児童のわかりやすさ・できる状況、児童への働き掛け、児童の行動に対する反応、授業評価、TT 等々

その他、授業反省会後における教生並びに指導教員に対するアンケートにおいては、次の内容についても問い掛けた。

授業反省会後のアンケート

前回の授業後の反省会での改善点並びに前回の指導案指導で学んだ（指導した）点のうち、今回の授業でいかせたと感じた項目を 3 点まであげてください。

3 結果及び考察

□指導案指導後の教育実習生に対するアンケート

教生が指導案指導で学ぶことができた内容を集計し、考察すると以下ようになった。

◇1 回目の指導案指導後のアンケート集計

・指導案指導で学ぶことができた項目

目標の精選	: 4 ■ ■ ■ □
目標の具体化	: 6 ■ ■ ■ ■ □
目標と題材との関連	: 2 □ □
目標と指導との関連	: 1 □
目標と児童の実態との関連	: 1 □
題材の分析	: 3 ■ □ □
教材	: 1 ■
指導計画の明確化	: 1 □
児童の実態と題材との関連	: 1 ■
本時案の授業展開のイメージ化	: 5 ■ □ □ □ □
一人ひとりに応じた手だて	: 1 □
児童への働き掛け方法	: 1 □
TT の役割	: 2 □ □
指導案の書き方	: 3 □ □ □

■：一番学ぶことができた項目

□：学ぶことができた項目

1 回目の指導案指導においては、教生 10 名全員が目標に関わる内容について学んだという結果が認められた。また、「目標と題材」「目標と指導」「目標と児童の実態」といった目標との関連から取り上げられた内容についても 4P あり、目標に関わる内容に関しては合計 14P であった。これは、全体の 43.8%にあたる。

一方、「本時案の授業展開のイメージ化」「一人ひとりに応じた手だて」「児童への働き掛けの方法」については 7P（21.9%）であった。授業における指導に関わる具体的な内容については、目標に関わる内容と比較すると学ばれていないという傾向が認められる。

これは、初回の指導案指導であるため、授業構成の中心に位置付く目標に関わる内容をより重点的に取り上げられたからとも考えられる。このことは、一番学ぶことができた項目として、「目標の精選」と「目標の具体化」を 6 名（60.0%）があげていることから認められる。

◇ 2 回目の指導案指導後のアンケート集計

・指導案指導で学ぶことができた項目

目標の精選	: 2 ■ ■
目標の具体化	: 1 □
目標と指導との関連	: 3 ■ □ □
目標と授業展開との関連	: 1 ■
題材の分析	: 3 ■ □ □
児童の実態と題材との関連	: 2 ■ ■
本時案の授業展開のイメージ化	: 4 ■ □ □ □
児童のわかりやすさ	: 3 ■ □ □
児童のできる状況	: 1 □
児童への働き掛け方法	: 3 □ □ □
一人ひとりに応じた手だて	: 2 □ □
指導の仕方	: 1 ■
TT の役割	: 1 □
指導案の書き方	: 2 □ □

■ : 一番学ぶことができた項目

□ : 学ぶことができた項目

2 回目の指導案指導では、目標に関わる内容が 1 回目と比較して 14P (43.8%) から 7P (24.1%) に減少していた。そのかわりに、授業における指導に関する内容(「本時案の授業展開のイメージ化」「児童のわかりやすさ」「児童のできる状況」「児童への働き掛け方法」「一人ひとりに応じた手だて」等)は、7P (21.9%) から 15P (51.7%) と増えていた。

これらの傾向は、第 1 回目の授業を経て、教生に対する指導内容が目標から授業における具体的な指導へと変化したためと考えられる。各授業の目標を確定し、その後に授業における具体的な指導のありようについて取り上げていくという段階を経た指導案指導の傾向があると推測される。

一番学ぶことができた項目も、「目標の精選」「目標の具体化」をあげているのは 1 名となっており、他は授業における指導との関連に関わる内容をあげている。このことから、1 回目の指導案指導とは質的に違った内容を取り上げており、授業における指導に関わる内容に指導の中心が移行しているという傾向が把握される。

◇ 3 回目の指導案指導後のアンケート集計

・指導案指導で学ぶことができた項目

目標の具体化	: 1 ■
目標と児童の実態との関連	: 1 □
題材の分析	: 1 ■
本時案の授業展開のイメージ化	: 4 ■ ■ □ □
児童のわかりやすさ	: 1 □
一人ひとりに応じた手だて	: 2 ■ □
指導の仕方	: 1 □
指導案の書き方	: 3 □ □ □

■ : 一番学ぶことができた項目

□ : 学ぶことができた項目

3 回目の指導案指導では、「目標の具体化」は 1P だけとなり、授業における指導に関わる内容は 8P (57.1%) であった。教生に対する指導内容の中心は、完全に授業における指導に関するものに移行していた。

また、「指導案の書き方」が 3 回目の指導案指導であるのに 3P となっていた。この項目に関しては、1 回目

3P、2 回目 2P あり、教生は指導案を記述した経験がないため、指導案指導を数回経たしても記述の仕方についていづれのわからなさがあったためと考えられる。

□ 授業反省会後の教育実習生に対するアンケート集計

教生が授業反省会で学ぶことができた内容を集計し、考察すると以下のようになった。

◇ 1 回目の授業反省会後のアンケート集計

・授業反省会で学ぶことができた項目

目標の精選	: 1 ■
目標の妥当性	: 2 □ □
目標と題材との関連	: 1 ■
目標達成に向けての方策	: 1 ■
児童の評価	: 1 □
教材の妥当性	: 1 ■
教材の工夫	: 1 ■
題材と指導との関連	: 1 □
授業展開の妥当性	: 3 □ □ □
授業のイメージ化の重要性	: 1 □
児童のわかりやすさ	: 2 ■ □
児童への働き掛けの方法	: 8 ■ ■ □ □ □ □ □ □
一人ひとりに応じた手だて	: 4 □ □ □ □
児童の行動に対する反応	: 1 ■
TT の役割	: 2 ■ □

■ : 一番学ぶことができた項目

□ : 学ぶことができた項目

1 回目の授業反省会で、教生が学べた項目として、目標に関わる内容 5P (16.7%)、授業における指導に関わる内容は 21P (70.0%) をあげており、後者の方が学べたとしている。この 21P のうち授業展開等を除く授業における指導に関わる内容が 15P (50.0%) であり、指示や説明、例示、促し、賞賛等の仕方に関する「児童への働き掛けの方法」については 10 名中 8 名があげていた。これらから、より授業に直結した具体的な教授方法について学べたという傾向が認められる。

また、一番学ぶことができた項目については、目標に関わる内容が 3P (30.0%) で、授業における指導に関わる内容については 5P (50.0%) であった。

◇ 2 回目の授業反省会後のアンケート集計

・授業反省会で学ぶことができた項目

目標の妥当性	: 2 □ □
児童の目標の意識化	: 1 ■
目標達成に向けての方策	: 1 ■
教材の有効性	: 3 ■ □ □
教材の分析	: 2 □ □
授業展開の検討	: 5 ■ ■ ■ □ □ □
児童のできる状況づくり	: 1 □
児童のわかりやすさ	: 2 □ □
児童への働き掛けの方法	: 5 ■ ■ □ □ □ □
一人ひとりに応じた手だて	: 4 ■ ■ □ □ □
児童の行動に対する反応	: 1 □
教員の授業に臨む際の姿勢	: 1 □
児童の関心と活動との関連	: 1 □
児童の行動の検討	: 1 □

■ : 一番学ぶことができた項目

□ : 学ぶことができた項目

2回目の授業反省会では、目標に関わる内容は4P（13.3％）、授業における指導に関わる内容は18P（60.0％）となっていた。今回も、授業展開等を除く授業における指導に関する内容は13P（43.3％）であり、授業に直結した具体的な手法や教授方法について学べたとしていた。傾向としては、1回目とさほど違いはなく、「児童への働き掛けの方法」や「一人ひとりに応じた手だて」といった具体的な指導に関わる内容について学べたとしてあげられていた。

一番学ぶことができた項目に関しては、目標に関わる内容が2P（20.0％）で、授業における指導に関わる内容については7P（70.0％）であった。

◇3回目の授業反省会後のアンケート集計

・授業の反省会で学ぶことができた項目

目標達成に向けての方策	: 1 ■
目標と題材との関連	: 1 □
児童の評価	: 1 □
評価の重要性	: 1 □
題材の妥当性	: 1 □
題材の分析	: 1 □
題材設定理由の再確認	: 1 ■
教材の有効性	: 1 □
指導方針確立の重要性	: 1 ■
授業展開の妥当性	: 4 ■ ■ ■ ■
児童のできる状況づくり	: 2 □ □
児童のわかりやすさ	: 2 □ □
児童への働き掛けの方法	: 4 ■ □ □ □
一人ひとりに応じた手だて	: 2 ■ □
児童の行動に対する反応	: 4 ■ □ □ □
TTの役割	: 1 □
教員の授業に臨む際の姿勢	: 1 □
指導案の書き方	: 1 □

■：一番学ぶことができた項目

□：学ぶことができた項目

3回目の授業反省会では、目標に関わる内容は2P（3.3％）となり、授業における指導に関わる内容が20P（66.7％）と授業反省会のかなりを占めるようになっていた。今回も授業展開等を除く授業における指導に関する内容は13P（43.3％）と高水準であった。

一番学ぶことができた項目に関しても、指導に関わる内容が8Pで80.0％となっていた。

□指導案指導後の指導教員に対するアンケート集計

指導教員が指導案指導で教生に重点的に指導した内容を集計し、考察すると以下ようになった。

◇1回目の指導案指導後のアンケート集計

・指導案指導で教生に重点的に指導した項目

目標の精選	: 3 ■ ■ ■ ■
目標の具体化	: 5 ■ ■ ■ ■ ■ ■
目標と題材との関連	: 4 □ □ □ □ □
目標と指導との関連	: 5 □ □ □ □ □ □
目標と児童の実態との関連	: 2 □ □
題材の分析	: 2 □ □
教材の分析	: 1 □
本時案の授業展開のイメージ化	: 5 ■ ■ ■ □ □ □
一人ひとりに応じた手だて	: 1 □
指導案の書き方	: 2 □ □

■：最も重点的に指導した項目

□：重点的に指導した項目

1回目の指導では、「目標の精選」「目標の具体化」が8Pとなっており、その全てが最も重点的に指導した項目となっていた。「目標と題材」「目標と指導」「目標と児童の実態」といった目標との関連から取り上げられた内容については11Pであった。目標に関わる内容に関しては合計19Pであった。これは全体の63.3％にあたる。「本時案の授業展開のイメージ化」や「一人ひとりに応じた手だて」は6P（20.0％）であり、指導教員はいかに目標について重点を置いているかがうかがえる。

◇2回目の指導案指導後のアンケート集計

・指導案指導で教生に重点的に指導した項目

目標の精選	: 3 ■ ■ ■ ■
目標の具体化	: 1 ■
目標と児童の実態との関連	: 3 ■ ■ ■ ■
題材の分析	: 3 □ □ □ □
児童の実態と題材との関連	: 1 □
本時案の授業展開のイメージ化	: 8 ■ □ □ □ □ □ □ □
前時との授業展開・活動の違い	: 1 ■
児童のできる状況	: 2 □ □
児童のわかりやすさ	: 1 □
児童への働き掛けの方法	: 4 ■ □ □ □
一人ひとりに応じた手だて	: 2 □ □
TTの役割	: 1 □

■：最も重点的に指導した項目

□：重点的に指導した項目

2回目の指導では、「目標の精選」「目標の具体化」が4P、「目標と児童の実態との関連」が3Pであった。目標に関わる内容に関しては合計7P（23.3％）であり、1回目の指導17P（56.6％）の半数以下となっていた。しかしながら、この7P全ては最も重点的に指導した項目であった。2回目の指導案指導ではあるが、1回目の授業を経て、更なる目標の精選や具体化が進められたものと推測される。2回目においても目標に重点が置かれていると言える。

「本時の授業展開のイメージ化」「前時との授業展開・活動の違い」が9P（30.0％）で、10名中9名の教生に対して指導していた。このうち2Pが最も重点的に指導した項目であった。これらより、2回目の指導案指導で、授業展開に関して指導する傾向が顕著になっていると言える。「本時の授業展開のイメージ化」等も含めた指導に関する内容は19P（63.3％）であり、目標だけでなく授業における具体的な指導についても重点を置いている。

2回目の指導は、指導教員が目標について取り上げた数は減ったが、1回目と同様に重点を置いた指導案指導をしており、その一方で、授業における指導に関わる内容についても重点を置いている傾向が認められる。

◇3回目の指導案指導後のアンケート集計

・指導案指導で教生に重点的に指導した項目

目標と児童の実態との関連	: 1 □
授業の評価	: 1 □

特別支援学校小学部での教育実習における教育実習生に対する指導内容

題材の分析	: 1 <input type="checkbox"/>
教材の確認	: 1 <input type="checkbox"/>
本時案の授業展開のイメージ化	: 4 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
児童のわかりやすさ	: 1 <input type="checkbox"/>
児童への働き掛けの方法	: 1 <input type="checkbox"/>
一人ひとりに応じた手だて	: 2 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
指導案の書き方	: 3 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>

■：最も重点的に指導した項目

□：重点的に指導した項目

3回目の指導では、目標に関わる内容については「目標と児童の実態との関連」1P（6.6％）のみとなっている。そのかわり「本時案の授業展開のイメージ化」が4P（26.7％、そのうち、最も重点的に指導3P）であり、それを含み授業における指導に関わる内容に関しては8P（53.3％）であった。

3回目の指導案指導で指導教員が指導した内容は、目標に関わる内容よりも授業における指導に関わる内容に完全に移行していると言える。

□授業反省会後の指導教員に対するアンケート集計

指導教員が授業反省会で教生に重点的に指導した内容を集計し、考察すると以下ようになった。

◇1回目の授業反省会後のアンケート集計

・授業反省会で教生に重点的に指導した項目

目標の精選	: 1 <input type="checkbox"/>
目標の妥当性	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>
目標の具体化	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>
児童の評価	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>
教材の妥当性	: 4 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
教材の工夫	: 2 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
授業展開の妥当性	: 5 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
授業のイメージ化の重要性	: 1 <input type="checkbox"/>
児童のわかりやすさ	: 3 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
児童への働き掛けの方法	: 6 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
一人ひとりに応じた手だて	: 2 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>
児童の行動に対する反応	: 2 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
TTの役割	: 1 <input type="checkbox"/>

■：最も重点的に指導した項目

□：重点的に指導した項目

1回目の授業反省会では、目標に関わる内容は3P（10.0％）であるが、授業における指導に関わる内容は20P（66.7％）となっており、後者の方に重点を置いて指導している傾向が見られる。授業展開に関する内容は6P（20.0％）、授業展開等を除く授業における具体的な指導に関する内容は13P（43.3％）であった。教生が実際に授業を行った後であるため、より具体的な指導方法や一人ひとりの特性に応じた対応について指導しやすくなっていることとも関連があると考えられる。

◇2回目の授業反省会後のアンケート集計

・授業反省会で教生に重点的に指導した項目

目標の具体化	: 1 <input type="checkbox"/>
教材の有効性	: 1 <input type="checkbox"/>
教材の工夫	: 2 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
活動内容の検討	: 1 <input type="checkbox"/>
授業展開の妥当性	: 7 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>

授業展開のスムーズ化	: 1 <input type="checkbox"/>
児童のできる状況	: 2 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
児童への働き掛けの方法	: 5 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
一人ひとりに応じた手だて	: 5 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
児童の行動に対する反応	: 3 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
教員の授業に臨む姿勢	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>

■：最も重点的に指導した項目

□：重点的に指導した項目

2回目の授業反省会も、1回目の傾向がより強く示される結果となっていた。目標に関わる内容は1P（3.4％）であるが授業における指導に関わる内容は21P（72.4％）であった。その中でも授業展開に関しての内容は8P（27.6％）で、「授業展開の妥当性」については項目別で最高ポイントであり、最も重点的に指導した項目としても4Pがあげられていた。

◇3回目の授業反省会後のアンケート集計

・授業反省会で教生に重点的に指導した項目

目標の妥当性	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>
目標達成に向けての方策	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>
目標と指導との関連	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>
評価の重要性	: 1 <input type="checkbox"/>
教材の有効性	: 4 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
教材分析の必要性	: 1 <input type="checkbox"/>
児童の実態と題材との関連	: 1 <input type="checkbox"/>
授業展開の妥当性	: 2 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>
児童のわかりやすさ	: 2 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
児童のできる状況	: 1 <input checked="" type="checkbox"/>
児童への働き掛け方法	: 3 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
一人ひとりに応じた手だて	: 7 <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
児童の行動に対する反応	: 1 <input type="checkbox"/>
TTの役割	: 1 <input type="checkbox"/>
教員の授業に臨む姿勢	: 1 <input type="checkbox"/>
指導案の確認	: 1 <input type="checkbox"/>

■：最も重点的に指導した項目

□：重点的に指導した項目

3回目の授業反省会は、目標に関わる内容は3P（10.0％）、授業における指導に関わる内容は17P（56.7％）であった。項目別に見た場合、「一人ひとりに応じた手だて」が7Pと最も多く、最も重点的に指導した項目としても3Pがあげられていた。このことは、一人ひとりの特性に応じた指導に向けた授業づくりがなされている傾向が示されていると考えられる。

□教育実習生が指導案指導並びに授業反省会を受けて授業にいかせたと感じた内容に関するアンケート集計

◇指導案指導から

児童の実態と活動内容との関連、目標の個別化、目標の具体化による指導の仕方の明確化、授業展開、評価

◇授業反省会から

目標達成のための手だて、学習活動の時間配分、児童の活動場面の設定、教材の工夫、児童の活動の把握、教材の提示の仕方、教材の片付け方、児童が興味をもつための導入の仕方、説明の仕方、活動に入りにくい児童への対応、児童の活動への注意の向け方、集合の仕方、児童が難しいと感じる場面の進め方、身体的アプローチの重要性、言葉掛けの仕方、わかりやすい学習展開、児童と

共に楽しむこと、指導案記述内容の精選

教生は、指導案指導からは目標に関わる内容についても授業にいかせたとしている。

一方で、授業反省会からは、「教材の提示の仕方」「教材の片付け方」「児童が興味をもつための導入の仕方」「説明の仕方」「集合の仕方」「言葉掛けの仕方」「身体的アプローチの重要性」といった具体的な教授方法、そして、「活動に入りにくい児童への対応」「児童の活動への注意の向け方」「児童が難しいと感じる場面の進め方」といった一人ひとりの児童への対応についていかせたとしている。これらの内容は、実際の授業で教生が上手くできなかったり、対応に困難を示したりしてアドバイスを受けたものであると言える。また、これらについては、授業反省会で具体的なケースを取り上げた上でアドバイスされているとも考えられる。

上記より、教生が指導を受けた内容がいかされるには、教生が授業において問題意識をもちえたか、指導教員が具体的なケースを取り上げてアドバイスしているかということと関連があると考えられる。

□指導教員が指導案指導並びに授業反省会を受けて授業にいかせたと感じた内容に関するアンケート集計

◇指導案指導から

児童の活動の明確化、目標の具体化、活動内容の精選、教材提示の仕方

◇授業反省会から

目標達成のための手だて、教材の工夫、場の設定、授業展開の工夫、授業展開、教材準備、学習展開の説明の仕方、教材の片付け方、丁寧な説明、言葉掛けの仕方、言葉だけでない指導の仕方、児童が自分で取り組める状況づくり、児童への働き掛けの仕方

指導教員も教生と同様に、指導案指導からは目標に関わる内容についても授業にいかせたとしている。

授業反省会からは、教生とは違う観点として「授業展開」や「授業展開の工夫」についてもいかされたとしている。これらについては、指導教員は実際の授業を参観して「授業展開」の変容を把握できるが、教生は「授業展開」には視点がいかず、具体的な教授方法や一人ひとりの児童への対応といった面に関心が向かいがちになってしまう傾向があるためとも考えられる。

□指導案指導で教育実習生が学ぶことができた内容と指導教員が重点的に指導した内容との一致

◇第1回目の指導案指導

目標の精選	: 3
目標の具体化	: 4
目標と題材との関連	: 1
目標と指導との関連	: 1
目標と児童の実態との関連	: 1
題材の分析	: 1

本時案の授業展開のイメージ化	: 4
一人ひとりに応じた手だて	: 1

◇第2回目の指導案指導

目標の精選	: 2
題材の分析	: 2
児童の実態と題材との関連	: 1
本時案の授業展開のイメージ化	: 3
児童への働き掛けの方法	: 1

◇第3回目の指導案指導

題材の分析	: 1
本時案の授業展開のイメージ化	: 3
児童のわかりやすさ	: 1
一人ひとりに応じた手だて	: 2
指導案の書き方	: 1

指導案指導1回目においては、目標に関わる内容で10Pの一致が見られた。その中でも、「目標の精選」と「目標の具体化」に関しては7Pの一致であった。1回目の指導案指導では目標に関わる内容について指導がなされ、教生もその重要性を十分に理解している傾向が把握できる。しかし、2回目の指導案指導では目標に関わる内容での一致は2Pに減少しており、3回目では目標に関わる内容に関しての一致は皆無となっていた。

授業における指導に関わる内容に関して一致した項目は、「一人ひとりに応じた手だて」「児童の働き掛けの方法」「児童のわかりやすさ」であり、各回で3項目まとめても1~3の一致数であった。

3回の指導案指導を通して「本時案の授業展開のイメージ化」に関しては、4P、3P、3P（5名の教生対象）とコンスタントの一致数をあげていた。

□授業反省会で教育実習生が学ぶことができた内容と指導教員が重点的に指導した内容との一致

◇第1回目の授業反省会

目標達成に向けての方策	: 2
教材の妥当性	: 1
教材の工夫	: 1
授業展開の妥当性	: 3
児童のわかりやすさ	: 2
児童への働き掛けの方法	: 4
一人ひとりに応じた手だて	: 2
児童の行動に対する反応	: 1
TTの役割	: 1

◇第2回目の授業反省会

教材の有効性	: 2
授業展開の妥当性	: 4
児童のわかりやすさ	: 1
児童への働き掛けの方法	: 3
一人ひとりに応じた手だて	: 3
児童の行動に対する反応	: 1

◇第3回目の授業反省会

目標達成に向けての方策	: 1
評価の重要性	: 1
教材の有効性	: 1
授業展開の妥当性	: 2
児童のできる状況	: 1
児童のわかりやすさ	: 1
一人ひとりに応じた手だて	: 2
児童の行動に対する反応	: 1
教員の授業に臨む姿勢	: 1

「授業展開の妥当性」の一致が、1回目3P、2回目4P、3回目2Pであった。「児童のわかりやすさ」「児童への働き掛けの方法」「一人ひとりに応じた手だて」等の授業に直結した具体的な手法や教授方法についての一致は、1回目9P、2回目8P、3回目5Pとなっていた。実際に行った授業の後に実施する反省会であるため、具体的な事例を取り上げ、より具体的なアドバイスがなされたものと考えることができよう。

4 総合的考察

(1) 指導内容の移行に関して

指導案指導及び授業反省会においても初期の段階では目標に関わる内容について取り上げ、次の段階として授業における指導に関わる具体的な内容について取り上げることには効果があることが把握された。これは、授業づくりの根幹ともいえる授業の目標、授業者の意図⁹⁾を明確にした上で、それに基づいて授業が構成されていくからである。そして、実際に授業を行ってから具体的な指導方法や個別的な対応について取り上げる方が、教生にとっては理解しやすいことも一因としてあげられよう。これらは、教生のわかりやすさに対応させて、授業づくりの指導を進めていくとよいという指針を見出すことにもなる。

(2) 授業づくりに関しての指導のポイント

指導教員は常に目標との関連で授業を見る傾向がうかがわれ、題材、教材、指導方法、児童の実態といった単

一の項目で授業分析をするのではなく、目標との関連で授業を見ている。教生においても、目標との関連から授業を分析する視点をもてるようになるとういだろう。また、教生は「授業展開」について学ぶことができたが、次の授業でいかせたと実感するには至っていない。「授業展開」は授業の構成全体に関わる内容であり、マクロの視点で授業を見る必要がある。「授業展開」に関しては、指導教員の説明があって初めて理解され、いかしていける内容と言える。教生はミクロの視点で授業を見ることはできてもマクロの視点で見ることは難しく、これらの視点についての指導も取り入れていきたい。

教生は授業づくりの経験も、授業を行った経験もないのであるから、教生が疑問や問題意識をもった内容に対して適切なアドバイスをしていく必要があると言える。教生が問題意識をもった内容に対するアドバイスの方が、指導内容が理解されやすいと考えられる。そのためにも、教生がイメージし、いかしていきやすいような具体的なアドバイスの提供が必要となる。

参考文献

- 1) 平成20年度版教育実習必携（特別支援学校編） 三重大学教育学部 2008
- 2) 小林宏己 「教育実習の実施形態と評価に関する研究」 教育実習研究 第18集 2005
- 3) 教育実習指導のあり方研究会 「教育実習指導のあり方」に関する総合的研究（Ⅱ） 2006
- 4) 前掲1 須曾野仁志 学習指導案作成をどう指導するか—PBL教育の展開を通して— pp10-18 2006
- 5) 井坂誠一・中村勝二 精神遅滞児の授業に関する一研究—教育実習生における関わり方の検討— 三重大学 教育実践研究指導センター紀要 第18号 pp107-116 1998
- 6) 太田正己 特別支援教育のための授業力を高める方法 黎明書房 pp60 2004